

複数の院内学級、小児病棟におけるサウジアラビアとの異文化理解授業

山本裕一^{*1}, 佐藤修^{*2}, 小柳千佳子^{*3}

^{*1}北海道大学情報基盤センター, ^{*2}キングサワード大学言語翻訳学部, ^{*3}札幌市立北辰中学校ひまわり分校

^{*1}Information Initiative Center, Hokkaido University

Email:sierra@iic.hokudai.ac.jp

概要：病院内に設置された院内学級では、様々な学年の子供達にたいして、個々の病状に応じて入院や治療などが行われる。このため子供達は空間的にも心理的にも閉鎖的な状況に置かれがちである。そこで、我々外界との接触が困難な子供達が容易にコミュニケーションをとるためのツールとして双方向遠隔通信環境による遠隔教育を行っている。北大院内学級では総合学習の一環として行うサウジアラビアの異文化理解授業をサウジで日本語を学ぶ学生と共に行う予定であるが、本稿ではその概要について報告する。

1. はじめに

2012年に国のがん対策推進基本計画が策定され、小児がんは重点的に取り組むべき課題の一つに位置づけられた。小児がん患者と家族が安心して適切な医療や支援を受けられる環境を整備することを目指し、2013年2月には全国15の「小児がん拠点病院」が指定された。北海道では北海道大学病院が指定され、地域の小児がん診療の中心的役割を担っている。2019年には整備指針が見直され、AYA（思春期・若年成人）世代の患者の医療・支援にも対応できることなどが指定要件に追加された。北大病院では小児・AYA世代がんセンターが設置され、単なる治療のみならず、病気療養中であっても他の健康な子どもたちと可能な限り同じ生活・教育環境の中で医療や支援を受けられるような環境を整備することを目指しており、院内学級や地域の学校との連携を目指している。

2. 北大病院院内学級ひまわり

病院内院内学級ひまわりは札幌市内の小中学校の分校という形式であるが、道内外から治療のため北大病院に入院している子供たちを受け入れている。毎年、小学生30名、中学20程度受け入れている。第一義的な目的は長期や短期の入院のため生じる学習の遅れを少しでも解消することであるが、小児がん等の重篤な症状での入院や治療などで、空間的にも心理的にも閉鎖的、抑圧的な状況に置かれやすい病気療養児の心理的な安定を図ることも大きな目的の一つである。そのために「気持ちの開放を図り、外に開かれた友人との交流を図る」ことは回復へ向

けての意欲を育てることにつながる。北大病院院内学級ひまわりではテレビ会議システムやWeb会議システム、SNSなどを用いて国内外のさまざまな人々と異文化交流をはかっている[1, 2]。

しかしながら、学習に参加できる状態ではあるが、無菌管理、個室管理中の児童や、教室に来られない児童は異文化交流のみならず通常の授業にも参加できない。また新型コロナウイルス対策として、北海道において一昨年では5月末まで教室での授業は行えなかった。今後も感染拡大の波第の襲来も予想されており、対面での授業が制限される可能性があるため、病室にしながら授業等に参加できる体制を整えることが急務である。

3. 院内学級のネットワーク環境

医療用LANの他に北大の学内LANであるHIENSが一部に敷設されており、1Fの院内学級教室でも利用することが可能である。教室内のPCやiPad、TV会議システム、ネットワーク機器はHINESに接続されており、児童はこれらの機器を通じてインターネットに接続し調べ学習や、国内外からの遠隔授業に参加するために使用できる。またHINESの他に札幌市教育ネットワークにも参加しており、札幌市教育委員会が提供しているネットワーク資源等にアクセスすることが出来る。昨年度には昨今のコロナ禍をきっかけとし、無菌管理中の入院児童や感染症の蔓延等で小児病棟から教室に来られない児童の学習の機会を保障するために、限定的な利用に限られるモバイルWiFiルータでなく、学内LANであるHINESを小児病棟に延伸し、無線LANのアクセスポイントを小児病棟の無菌室2室、学生実習室、プレイルームに設置することとした。無菌室以外の児童は4、

5名程度が入室可能な学生実習室、もしくはプレイルームを利用する。ここではAPの他、高品質な映像、音声でのやり取りが可能なTV会議システムも設置したので、端末を利用しながら複数の児童が教室からの遠隔授業に参加することができる[3]。

4. 複数の院内学級が参加する異文化学習

これまで我々は、総合学習の一環としてアラスカ大学、国立天文台ハワイ観測所、サウジアラビアキングサウド大学、北大北京オフィス、中国東北師範大学、ベトナム、マレーシア、台湾とテレビ会議システムで結んできた。異文化理解や各教科の発展的補完の総合的な取り組みと位置づけるとともに、各教科の今後の学習の動機付けとなるべく授業を行ってきた。これらの海外からの遠隔授業は講師の都合等により定期的に行えないことや、授業を行えた場合でも病気療養児の容態により参加できる児童がわずかになってしまい、数少ない遠隔授業の機会を生かせない場合もあった。そこでPolycomの多地点接続機能やWeb会議システムを利用し、大阪大学院内学級、関西医科大院内学級にも参加してもらう事によって児童の不参加による授業の中止という事態を回避している[4, 5]。また近年急速に普及したZoomにより、これまで機材や回線の問題で参加できなかった他病院の院内学級や病室の児童にも都合が合えば参加してもらえるようになって来ている。

5. サウジアラビアに関する異文化理解授業

サウジアラビアに関する授業は2014、5年にキングサウド大学よりノートPCにインストールしたTV会議システムと北大院内、阪大院内学級のTV会議システムを結んで試行した。図1ではPolycom画面で左上が阪大院内、右上はキングサウド大、画面下には北大院内が映されている。当時は大学の回線を利用したが、今回、6月に再開するに当たり、サウジの通信最大手STCもモバイル回線を利用してZoomで行った。キングサウド大学のネットワーク経由でTV会議システム、Zoom等のWEB会議システムを比較検討する予定であったが、事情により行えなかったが今後の検討事項でもある。今回の参加校は、北大院内学級、札幌山の手支援学校、大阪府立刀根山支援学校（本校教育部、訪問教育部、阪大分教室、滝井分教室）など病室も含めて10箇所へのぼる。今回参加した児童、生徒は小学部から高等部までの20名であったので、授業内容はどの

学年にも興味を持ってもらえるサウジアラビアの地理、言語、文化の紹介、アラビア数字を使ったゲームとした。2014年当時はキングサウド大翻訳学部在籍する日本語を学ぶ学生は10名ほどであったが、現在は100名近くまで増えており、日本語学習熱も高くなっており、今回の遠隔授業にも日本語を学ぶ学生に参加してもらうことができた。日本側の児童生徒がサウジアラビアの文化を紹介してもらうだけではなく、サウジの学生にも日本語でのコミュニケーションを体験してもらう機会となるよう希望している。



図1 前回のサウジアラビアからの遠隔授業の様子

6. 参考文献

- [1] 山本裕一、西堀ゆり、吉田徹、『掲示板型ツール「コラボード」と「コラボード広場」による院内学級での協調学習—院内学級での遠隔協調学習におけるシステム構築—』、教育システム情報学会第29回全国大会講演論文集、55-56(2004)
- [2] 山本裕一、吉田徹、西堀ゆり、『院内学級における学習者・教授者間コミュニケーションの活性化』、『平成17年度情報処理教育研究会講演論文集』64-65(2005)
- [3] 山本裕一、井口晶裕、島田貴弘、小柳千佳子「小児病棟への学びのための高速ネットワークの導入について」、『大学ICT推進協議会2020年度年次大会論文集』FB1-4、296-297(2020)
- [4] 山本裕一、黄松愛、佐藤修、小柳千佳子、霜村耕一、伊藤かおり、濱田和、佐藤聖子、西牧謙吾「院内学級におけるテレビ会議システムを用いた日中異文化交流授業」、『教育システム情報学会第41回全国大会講演論文集(H5-4)』、1-2(2013)
- [5] 横山強「特別支援学校の分教室におけるICT等の活用実践例について」、『特別支援教育』、No. 58、28-3(2015)
- [6] 山本裕一、佐藤修、小柳千佳子、霜村耕一、伊藤かおり、梶原英幸、佐藤聖子、吉井英一、西牧謙吾、西堀ゆり「複数の院内学級によるテレビ会議システムを用いた異文化学習」、『教育システム情報学会第40回全国大会講演論文集』、115-116(2015)